

◆ 摂食嚥下機能支援研修会・特定給食施設栄養管理講習会を開催しました

8月25日(月曜日)、多摩小平保健所では「令和7年度摂食嚥下機能支援研修会・特定給食施設栄養管理講習会」を開催しました。本講習会は管内5市の給食施設の管理栄養士・栄養士や歯科医院の歯科医師等を対象にオンラインと会場受講のハイブリット形式で行い、65名の参加がありました。

今回は、地方独立行政法人東京都立病院機構東京都立多摩北部医療センターの言語聴覚士 佐野剛雅 氏を講師にお迎えし、「“食べる”を支えるプロフェッショナルへ～評価・食事形態・介助方法・リハビリによる嚥下支援～」をテーマに開催しました。

講演では、摂食・嚥下機能の評価手順、評価結果に基づく適切な介助方法や嚥下リハビリ等について、先生の豊富な臨床経験を踏まえた、現場での実践につながる具体的な内容が紹介されました。

また、嚥下機能の精密検査法である内視鏡検査及び嚥下造影検査について動画を用いて解説をいただき、参加者にとって嚥下機能及び誤嚥のメカニズムに関する深い理解に繋がりました。

受講後のアンケートでは参加者の約98%が「参考になった」と回答し、日常業務に直結する大変有意義な講習会となりました。

今後も当保健所では、講習会の開催を通じ、給食施設での栄養管理の向上と歯科保健の普及啓発を進めていきます。



講義の様子

◆ 学校保健と地域保健との連携会議を開催しました

8月18日（月曜日）、多摩小平保健所では、「令和7年度学校保健と地域保健との連携会議」をオンラインにて開催しました。委員は、当圏域5市の学校保健会代表（学校長部会・学校医部会・学校歯科医部会・学校薬剤師部会）、各市の教育主管課長及び母子健康主管課長等で構成しており、当日は代理出席を含め18名に御参加いただきました。

本会議は、学校や地域保健関係機関とのネットワークを強化し、児童・生徒の健康づくりや疾病予防等に係る健康教育及び相談体制等の充実を図ることを目的に、平成17年度から開催しています。

当所では、これまで本会議での意見を取り入れながら、こころの健康づくりや自殺対策に取り組み、小中学生向けの自殺予防啓発小冊子等を作成するなど、普及啓発を行ってきました。

近年、全国で自殺者数が減少傾向にある一方で、小中高生の自殺者数は増加傾向にあり、令和6年には529人と過去最多を記録したことを踏まえ、今年度の連携会議では「子どもの自殺対策」をテーマに、学校現場等、各委員の視点から意見交換・情報共有を行いました。

当日は、各市で実施している子ども・若者向け自殺対策事業を御紹介いただきました。スクールソーシャルワーカーの活用促進やLINE相談、母子保健分野と連携した課題の早期発見等、様々な取組が挙げられました。

また、東京学芸大学名誉教授の渡邊正樹先生に「自殺防止教育の実際と課題」として、学校現場における自殺予防教育の前提条件や実践例等について御講義いただきました。

意見交換では、「学校でも、何かあったら周りの信頼できる大人や窓口に相談するよう子どもたちに伝えている。質を上げていかなければならないのは教職員による気づきの力であり、少しの変化に対しても組織的に対応することが大事と感じている。」「講義にあった『自殺防止教育では管理職である校長の意識のどちらがとても大事』という点に非常に共感した。」という意見がありました。

最後に、最新の感染症流行状況について情報提供を行いました。

多摩小平保健所では今後も、学校保健と地域保健との連携を深め、児童・生徒の健康づくりや疾病予防・回復に向けた健康教育と相談体制の充実を図ります。



会議の様子

◆ 市町村支援研修（災害対策編）を開催しました

7月18日（金曜日）、多摩小平保健所では、北多摩北部保健医療圏市町村支援研修（災害対策編）として、災害対策研修「避難所での感染拡大から住民を守る～感染症対策の基本とおう吐物処理の実践～」を開催しました。

本研修は、市職員が避難所における感染症対策の重要性を理解し、その知識を避難所運営に携わる者に自ら情報共有できるようにしていくことを目的に、北多摩北部圏域5市の健康、防災、高齢、保育及び教育主管課等の職員等を対象に集合形式で実施し、市から計15名の参加がありました。

研修前半では、初めに、草深地域保健推進担当課長から、「避難所における感染症対策」をテーマに、感染対策の基礎知識を再確認するとともに、避難者の健康管理等について講義を行いました。次に、感染症対策担当職員から、「おう吐物処理について」をテーマに、避難所でのノロウイルスの発生を想定したおう吐物処理方法について、実演を交えながら講義を行いました。講義では、特に、誰もがおう吐物を処理できるようにするために必要なことは何かという視点で解説を行いました。

研修後半では、演習として、疑似おう吐物を用いた処理体験をしていただきました。参加者は指示者、処理者、補助者の3つの役割を分担し、処理を行いました。ガウン・手袋の着脱方法やおう吐物の拭き取り等、経験のない作業に苦戦する参加者が多く見られました。

参加者からは、「平時からの準備がとても大切であることを改めて感じた。発生した際に対応ができるよう、準備していきたい。」「思っていた以上に広範囲に拡がるので、保育園の小さな部屋だと全て消毒する必要があると感じました。」「職員会議等で全職員に周知していきたい。」「すごく勉強になりました。実践は身体で覚えられてよいと思いました。時間が経つと詳細を忘れていることがあるので、来年も実施してほしいです。」といった感想がありました。

また、研修終了後に手洗いチェッカー※を用いて手の洗い残しをチェックする体験コーナー等を設け、希望者に実践いただきました。

多摩小平保健所では、引き続き圏域各市と連携し、災害時の保健活動体制整備に取り組んでいきます。

※手洗いチェッカー：専用ローションを汚れに見立てて手に塗り、手洗い後特殊ライトの下に手をかざすと洗い残しが光り、適切な手洗いができているか確認できる機材



◆ 感染症対策講演会を高齢者施設向けに開催しました

7月14日（月曜日）、多摩小平保健所では、感染症対策講演会「高めよう！高齢者施設の感染対策力～ここは押さえたい！ケア場面における対策ポイント～」を開催しました。この講演会は、管内の高齢者入所施設職員が、標準予防策や感染経路別予防策について理解を深め、平常時から適切な感染予防策ができるよう、具体的な知識の普及を図ることを目的として開催し、管内の15施設から17名の参加がありました。

前半は、講師にむさしの救急病院 感染管理認定看護師の河瀬員子氏をお招きし、「標準予防策」^{かわせかずこ}※をテーマに、感染対策の基本的な知識について講義をいただきました。

後半は、グループに分かれ、介護現場の具体的な場面を想定した事例による演習と、日ごろの施設での感染対策について意見交換を行いました。グループワーク終了後には、河瀬氏から事例に対する振り返りと、各施設の感染対策の課題への助言をいただきました。

参加者のアンケートでは、講義については、「感染を広げないために、初期対応が大切だと思いました。」、「感染症の基本的なことを再確認、再認識することができました。」、グループワークについては、「グループワークの内容を通して他施設の感染対策環境、意見交換をできたことは有意義でした。」、「悩みの点は同じであり、参考になりました。」等の感想が寄せられました。

当保健所では、今後も管内の施設との連携を深め、平常時から感染症対策の強化を図っていきます。

※標準予防策

感染症の有無に関わらず全ての患者に普遍的に適用される感染予防策



講演会（グループワーク）の様子

◆ 健康づくり調理師研修会を開催しました

7月2日（水曜日）および7月8日（火曜日）、多摩小平保健所では、「健康づくり調理師研修会」を開催しました。本研修会は、市民の食生活の質の向上と健康づくりの推進を図る担い手を育成するため、管内の飲食店等で調理業務に従事している方を対象に、両日同一の内容で実施し、延べ29名の参加がありました。

当保健所では、市や関係団体と連携して管内市民の野菜摂取量の増加に取り組んでおり、今回は、「簡単 ベジスイーツ講座」と題して、野菜をスイーツの材料として活用する工夫をテーマに取り上げました。講師には、オレンジキッチンクッキングスタジオ代表で料理研究家のたしろゆきこ氏をお招きし、野菜の色や味、食感を活かしたレシピを考案する工夫について、調理デモンストレーションを交えて紹介をいただきました。続いて、参加者がペーストにした人参で作る「人参チーズケーキ」、ホールトマト缶を使った「トマトヨーグルトムース」を試食し、野菜特有の香りや酸味を他の食材との組み合わせを工夫することで、苦手な方にも食べやすくなることを実感していただきました。

アンケートでは、「野菜の意外な使い方を知ることができ、とても参考になった。」「スイーツにどのように野菜を取り入れていけばよいのか、ヒントが得られた。」などの感想が寄せられ、大変好評でした。

当保健所では、今後も地域住民の健康づくりを推進するため、地域の食環境整備を進めていきます。



調理デモの様子



出来上がったベジスイーツ

◆ 小規模プール衛生管理講習会を開催しました

7月7日（月曜日）、多摩小平保健所では、小平市民文化会館（ルネこだいら）中ホールにて、小規模プール衛生管理講習会を開催しました。この講演会は、プール等取締条例の許可や届出の対象外となる貯水容量50m³未満の小規模プールを設置する幼稚園や保育所等を対象に実施しているもので、今年度は以前のアンケートで希望の多かった熱中症に関する講演を企画し、許可・届出プールの管理者にも参加を呼びかけ、138名の参加がありました。

第一部は、早稲田大学スポーツ科学学術院准教授の細川 由梨先生を講師にお招きし、「プール活動中の暑熱リスクについて考える」と題して講演をいただきました。細川先生は、東京2025世界陸上などのスポーツ大会や海上保安官などの暑熱対策に携わっておられ、当日も様々なフィールドワークの御経験に基づく実践的なお話をいただきました。また、会場からの活発な質問に、わかりやすく回答をいただきました。

第二部は、当所職員から、「感染症の基礎知識をおさえて夏に流行する感染症に備えよう！」「プールや水遊びの衛生管理」と題して説明を行いました。

受講後のアンケートでは、「熱中症について現場で困っているこの対応や考え方を聞くことができた。」「感染症やプール活動時の留意点を再確認できた。」など多くの感想が寄せられ、参加者のプールや水遊びの活動に対する安全と衛生の意識の高さを感じられました。

当所では、今後も、プールを管理する施設への普及啓発や相談を通じ、プールの安全・衛生の確保を図っていきます。



講習会（第一部）の様子

◆ 感染症対策担当者連絡会を開催しました

6月30日（月曜日）、多摩小平保健所では、「感染症対策担当者連絡会」を開催しました。本連絡会は、平常時からの医療機関相互の連携を図ることで、院内感染対策の強化につなげ、保健所管内全体の感染症対策の強化と質の向上を目的としています。今回は、管内43医療機関のうち、34機関の参加がありました。

前半は、医療法人社団時正会佐々総合病院 感染管理認定看護師の北明 幸子氏より、「手指衛生促進に向けたリンクナース^{※1}育成とICT^{※2}の活動」をテーマに、感染対策でリーダーシップが取れるリンクナースを育成するために実施した取組みについて紹介をいただきました。リンクナースが主体的に取り組めるよう、所属長にリンクナースの働きを知ってもらうことや、所属長からリンクナースへの働きかけにより、日頃から人間関係の形成を図るといった取組みを実施しているとのことでした。また、リンクナースが作成したショートビデオや、各部署での手指衛生促進に向けた工夫なども紹介いただきました。

後半はグループに分かれ、「手指衛生について 取組みと課題」というテーマで情報交換を行いました。

参加者からのアンケートでは、講義については「ポジティブフィードバックの重要性、視覚的なビデオの活用などが参考になった。」、「リンクナースに主体性をもたせることが大切。」、グループワークについては、「所属長による協力や介入も大きな影響があると分かった。」、「職員の集合研修の際の工夫について具体的に聞くことができて参考になった。」などの感想が寄せられました。

当所では、今後も医療機関との連携を推進し、様々な事業を通じて保健所管内の感染症対策の強化を図っていきます。

※¹リンクナース：医療機関において各分野の専門チームや委員会、他職種と病棟看護師の橋渡しとなる看護師を指す。

※²ICT：「Infection Control Team（インフェクション コントロール チーム）」の略語で、病院全体の感染管理をはじめ、院内の感染症対策を行う組織



会議の様子

◆ 難病対策地域協議会を開催しました

2月20日（木曜日）、多摩小平保健所では、「意思決定支援の前提となる難病患者の『生きる』を支える支援について」をテーマに、令和6年度多摩小平保健所難病対策地域協議会を開催しました。

当日は、管内の地域医療機関、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、社会福祉協議会に加え、東京都難病ピア相談室、東京都医学総合研究所など16機関の皆様にご参加いただきました。

医療依存度の高い在宅神経難病患者の「意思決定支援」について、委員から「患者の医療機器の装着をどうするかだけでなく、今後どのように生きていきたいかを支えるのが本当の意思決定支援である。」という意見や、「意思決定支援のためには、より早期から関わりを始めることで、『その人らしい』暮らしの支援につながる。」などの意見が挙げられました。

難病への支援で困難なケースとして、急速な病状進行や若年での発症があげられます。特に若年での発症の場合、診断初期の段階では、病気への戸惑いや予後に關わる不安とともに、仕事や子育てなど日常生活全般の変化に直面することから、多岐にわたる相談支援が求められます。そのため、初期に關わった支援者が、相談支援を通じて把握した患者・家族の信条や大切にしたいと思っていることなどを、病状進行に伴い新たに加わる支援者に繋ぎ、チームとして本人・家族の様々な意思決定を支援していくことの重要性についても確認されました。

今回のテーマについて、引き続き意見交換等を行いたいとの希望や、若年患者が利用できる地域サービスについて情報交換したいとの意見も寄せられていることから、次年度以降も引き続き関係者とともに、神経難病患者がその人らしく「生きる」ための地域づくりに取り組んでいきます。



会議の様子

◆ 北多摩北部保健医療圏精神保健医療福祉ネットワーク会議を開催しました

2月7日（金曜日）、多摩小平保健所は、「北多摩北部保健医療圏精神保健医療福祉ネットワーク会議」を開催しました。本会議は、圏域5市における関係機関との協議を通じた「精神障害にも対応した包括ケアシステム（以下、「にも包括」という。）の推進」を目的に開催しています。

今年度は、「措置入院者の退院後支援の現状から考える『にも包括』の推進」をテーマとし、措置入院や医療保護入院等の非自発的入院を取り扱う管内精神科病院、訪問看護ステーション、市障害福祉主管課など16機関、16名に参加いただきました。

会議では、措置入院からの退院者の状況や、訪問看護ステーションを対象に実施したアンケート調査の結果を共有しました。入院病院での、退院後の地域生活を再構築するための取組や、訪問看護ステーションの退院後の支援について意見交換を行いました。

また、退院後に地域でその人らしく生活するために必要な支援や資源について検討し、「対象者の多くは援助希求力も弱く、既存の福祉サービス等の利用につながりにくい。」、「訪問看護ステーションが対象者の状況に合わせて生活支援も担うなど支援の要となっている。」、「対象者の力を引き出しエンパワメント※し続ける関わりが重要。」、「対象者理解を深めるためには介護保険制度のように多機関・多職種による定期的な情報共有・評価の場が必要。」などの意見が出され、今後の取組に繋がる課題を共有できました。

最後に、多摩総合精神保健福祉センターの井上 悟 所長から、精神保健福祉法改正と「にも包括」推進のための他地域の取組などについて情報提供いただきました。

当所では、精神保健について、今回共有された課題に対する取り組みを、対象者を主体として関係機関と連携・協働しながら進めています。

※エンパワメント：その人の有するハンディキャップやマイナス面に着目して援助をするのではなく、長所、力、強さに着目して援助すること。



会議の様子